

山椒は小粒でも…

いつでも、どこでも、
誰でも、少しでも

Vol.65



5月、新年度が始まってから1か月がたちました。子どもたちは元気に登校しているでしょうか。

ついでに前まで、私の住む地区には子どもたちの登校を見守る「タッチのおじさん」がいまいた。おじさんは毎日毎日、雨の日も風の日も通学路の横断歩道に立ち、子どもたちとタッチを交わしました。やさしくタッチを交わす子がいたり、中には何かをぶつけるように思い切りグーの手でタッチをする子がいたり、伏し目がちで目を合わせなくても、タッチだけは忘れない子がいたそうです。おはようの挨拶はもちろん、「朝ごはん食べてきたか?」「今日はちよつと遅いやんか!」とひと声かけるのを忘れません。

てきたのが「この子もうちの子」というフレージです。保護者以外にも響く、地域全体で子どもを見守る感じさえええなあというところで、さつそくのぼりとジャンパーを作りました。色はオレンジ色にしました。



そして、私たちはそこにひと工夫しました。のぼりは立てっぱなしにせず、月のうち5日、15日、25日と5のつく日に立てる。場所は通学路が望ましいが、どこでもいいことにしました。一日早かろうが、数日間しまい忘れていようが気にしません。「ここに絶対立てなければならぬ」ということにもこだわりませんでした。ジャンパーも賛同者を募って提供しました。いつ、誰が着るとの決まり

はありません。買い物でもウォーキングでも畑仕事でも外出の際好きなききに羽織ってもらえればいいのです。のぼりを立てたり、ジャンパーを着たりすることその人の「地域の子どもたちを思う」気持ちにスイッチが入れば、それでいいのだと考えました。つまり、「いつでもどこでも誰でも少しでも」の精神です。

この完璧を求めない精神は、負担感なく、継続しやすいと評判になりました。タッチのおじさんは、県内各地に赴き、教職員に講演し、なんと県議会の委員会に招致されて意見を述べる機会もありました。しかし20年を経てタッチのおじさんが亡くなられ、さすがにオレンジを見かけることが少なくなりました。ちよつとさみしいです。私も初心に戻って、このものにのぼりを立てねばと思っています。おつと、「立てねば」という義務感では趣旨に反します。タッチのおじさん(故中世古光正氏)を思つて「立てたいなあ」と思っています。



Vol.220

市民課人権・市民交流係
☎ 1126

異次元の少子化対策

今年、岸田総理が年頭の記者会見で「異次元の少子化対策」に挑戦することを表明しました。

「少子」という言葉には、本来、「一番若い子。末子」という意味がありますが、1998年の「広辞苑」では、「出生率が低下し、子どもの数が減少すること」と定義されています。

日本における少子化の現状について「人口動態統計速報(令和4年12月分)」によると、2022年の出生数は79万9728人(前年比5.1%減)と過去最少となりました。80万人を下回るのは、1899年の統計開始以来初めてのことです。

少子化の原因として、「子育てに対する負担感の増大や

「経済的不安定の増大」などが挙げられます。育児休業をとりやすい環境を整えるべく、2022年4月に「育児介護休業法」が改正され、会社は従業員に対し育児休業の周知と、育児休業を取得する意思があるかを確認することが義務となりました。育児休業取得が、家事や育児への積極的な関わりにつながり、その結果、負担の偏りが軽減されて仕事に復帰しやすくなるなど、経済面にも良い影響をもたらすと考えられます。

また、保育や教育の整備により、安心して働きに行ける環境を作ることも重要です。

4月にはこども家庭庁が発足し、子どもや若者が意見を表明し、社会に参加することができる取り組みとして「こども若者★いけんぷらす」も始まりました。小学1年生から、おおむね20代のかたであれば、誰でもいつでも登録でき、対面、ウェブアンケート、チャットなどの方法で参加できます。大人だけでなく、子どもと一緒に未来を考え、みんなが安心して子育てができ、子育て中もいきいきと活躍できる社会となることを期待します。